

# 忘却の奇想曲

津梨つな

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幼馴染四人と平凡でありながら居心地の良い日々を送る主人公、きくちたかし菊池高志。  
繰り返される日々の中、少しずつ紐解かれていく幼馴染に纏わる謎。  
変わりゆく関係と明かされる真実に少年は何を想うのか。

「俺はどうやら夢を見ているらしい。酷く醜くも美しい、友情の夢を。」

\* \* \* \* \*

※不定期更新です。

※独自設定あります。

※死亡設定・鬱展開あります。

※上記が苦手な方は閲覧ご注意です。

始  
まり

目

次

# 始まり

俺達幼馴染はずつと一緒で、ずっと一つだつた。隠し事も無く、気兼ねもしない居心地の良い場所。

…少なくとも、俺はそう思つていた。

\* \* \*

「……ねえってば！ 聞いてるの？ タカくんっ！」

「…えつ？」

「またボーッとしちやつてさ、何か考え方？」

「ああ、わりいなひまり。」

俺の名前は菊池高志。きくちたかし特に特徴もない平凡なただの男子高校生つてやつさ。今は大學受験に向けて、真面目に勉学に勤しんでいたつて訳だ。

そこで、話しかけてきたこのピンク髪はひまり<sup>うえはら</sup>…上原ひまり。…中学の頃から付き合っている間柄でありながら、親同士が親しい幼馴染の関係でもある。…で、実はその幼馴染、俺を含めて五人も居るんだ。本当は六人居たんだけど、色々あつて今は五人だ。ま、ひまり以外の幼馴染については追々語つていこうと思う。

「で、何の話してたつけ？」

「だーかーらつ！ 巴<sup>ともえ</sup>と遊びに行く場所、何処にするかつて話!!」

「ああ：そうだつたな。」

両手をばたばたしつつ声を荒げるひまり。…こんな風に少々感情やリアクションがオーバー過ぎるというか子供っぽい一面がある奴だけど、何だかんだで可愛らしいと思えてしまう。そんな奴だから、ここまで付き合つてこれたんだと思う。

「よしよし、悪かつたな。んじや、ちやつちやと決めちまおうぜ。」

「んう。……そーやって撫でれば大人しくなると思つてるでしょ？」

「違うのか？」

「…………んーもつとやつて!!」

「ははっ、よーしょしょしょし」

ムツゴ○ウさんばりにその髪を撫でまわしてやる。サラサラの髪の隙間から覗くルビーのようなローズピンクのツリ目も、ムツとしたような口元も全てが愛おしい。

俺達は、こうして毎日を一緒に過ごしてきたんだ。

「…まあこんなもんでいいだろ。遊びに行くつたつて、ひまりの方で候補とかあるのか？」

「うーん…あ、私は、タカくんと一緒に別にどこでもいいんだけどさー。」「そりや嬉しいけど、巴にそのまま伝える気か？」

「…だめかな。」

「ダメじゃねえけど…」

あいつの苦笑する顔が浮かぶわな。

巴——宇田川巴は、俺達幼馴染衆の中で「頼れる姐さん」ポジションに就いている

奴だ。正直なところ、本当に同じ年なのか怪しくらい落ち着いているし、面倒見が良すぎる。俺とひまり：あと一人、困った奴が居るんだが、その三人を纏めて世話をちま

うほどだ。

背も高いし赤い髪はクールだし、イケメンを体現してるんだよなあ…。

「ま、そのまま笑われるのも癪だしある程度は決めとこう。」

「そうだね。…………あ！」

「ん。」

スマホをタタタツと弄るひまりが声を上げる。覗いた画面には、”生け花 展覧会”的文字が。

「…あいつが生け花ってガラかよ。」

「ええー？ でもでも、絶対面白いと思うなー。：ほら、体験もできるみたいだよ？」

「そりやお前がやりたいだけだろ…。」

巴は大人しい割に”趣”だの”詫び鑄び”つてのはホント駄目だからな…。あいつ曰く「アタシはロツクに生きてんだよ！」らしいし、そんなロツクンロール主義者を純和風の空間に連れて行くのもなあ。巴の事だから嫌がりはしないだろうけど、幼馴染程

氣心の知れた仲でそれをやらかすのは少々申し訳ない。

逆にひまりは、”華道”だ”茶道”だと和の世界を愛しすぎてるからな。普段の服装は矢鱈とパンクな癖に、ホント何なんだろう。

「じゃあもうタカくんが決めて!!」

「ええ……? なんだろうな、ゲーセンとか?」

「それだけを目的に出歩きたくないよ…。もつとこう、休みじやないと行けないとみたいなさあ。」

「そんなこと言われても……ああもう。じゃあ巴も交えて話そうぜ? 結局行くのは三人なんだから。」

「……そもそもそうだね。じゃあ、あたしの方から連絡しとくね??」

「…………あたし?」

「え? ……私、何か変な事言つた??」

「……いや。まあ、連絡は任せた。もうスマホ触るのもめんどい。」

「も――……。」

おかしいな。確かに「あたし」って聞こえた気がしたんだが。…まあ、「わ」も「あ」

も近い音だし、聞き間違いだろうな。

この幼馴染連中、ややこしいことに一人称が少しずつ違う。ひまりは「私」で巴は「アタシ」。一文字の違いではあるけど、それが四人分集まると……個性が出てていいっちゃいいんだけどさ。

俺は、何やらポチポチとメツセージを作り始めるひまりを尻目に、俺なりの遊び場所を連想することで時間を潰すことにした。

\* \* \*

ボーン……

「お、きたな。」

来客を告げるチャイムの音にパチパチとインターほんのモニターを操作する……と映し出される、深紅の髪を肩のあたりで切り揃えた見慣れた顔。相変わらずカメラの位置が分からぬのか、目線がやや上を向いていて面白いことになっている。

『タカー、いるかー?』

「おーう、そのまま上がつちやつてくれい。」

『おう。』

短い会話の後、ガチャーンと玄関が開かれる音…数秒の間を置いて、トトトツと軽い足取りがフローリングを叩く音が近づいてきた。

…どうしてあいつはいつも小走りなんだ。

カチヤア

「おっすー。」

「よつすー巴ー。」

「いらつしやい!とーもえつ!…きやつ!?」

ボフツ

まるで自分の部屋であるかのようにベッドに倒れ込む巴。道連れにされたのはひま  
りだ。

暫くそのままモゾモゾと蠢いていたり、つくづく大型犬を連想させる女よ…。  
うわ、めっちゃ耳舐めてる…。

「おい巴、人の彼女寝取んなよ?」

「…ふはあ！…アタシ女だぞ？心配の仕方がおかしーだろ。」

「人ん家來ていきなり女の子押し倒すような奴に何の心配もしない方がおかしーだろ。」

近づき、ベッドの上で息も絶え絶えになつていてひまりを抱き起こす。顔は赤く、服もかなり乱れているあたり、見ようによつては情事を連想しなくもない。  
抱き寄せると荒い息のままどこか遠くを見るような顔で…

「一体何をどうしたらこうなるんだ…？」

「それはな、右手は背中で左手が胸だろ？それで耳元で」

「言わんでいい。」

「へへっ、態々言わなくてもタ力なら分かつてることだもんない。」

正直感覚としては、クラスの男友達とライトな下ネタトークを繰り広げている雰囲気

に近い。それが俺と巴の、いつも通りの関係だつた。：だつたのだが、

「どうしてくれんだ、巴。」

「仕方が無かつたんだ：ひまりが可愛くてつい。」

「そこは……まあ否定しないが。」

それでも、ひまりをダウンさせるのは流石にやり過ぎだ。体もピクピク痙攣してんじやねえか。：ほんとに、どうしたら一瞬で此処までになるのか後で訊いてみたいもんだ。

「……んで？ 遊びに行くと、決まらないんだって？」

「それな。」

「急に遊びに行くつづつたつて難しいんだぜ？：ひまりはともかく、俺はそもそも外出  
どこから取り出したのか紙パックの黒酢をストローでチューチューチューと吸い上げながら胡坐をかく巴。オツサンか。

が好きじやねえんだから。」

「だからだろーが。タカ、お前もう少し日光浴びなきやもやしになつちやうぞ。」

「ならねえわ。：だから、さつきもゲーセンとか提案したんだけど、コイツは却下だつて。」

「ゲーセンは無いわ。」

「うつせえ。」

未だ腕の中でぐつたりしている恋人にキツイ視線を送るも、それが気にならないほどには惚けているようだつた。

「……どのみち、ひまりがこんな状態じや決めるもんも決まんねえよな。」

「……やり過ぎたかあ。」

「お前、もうスキンシップ禁止な。」

「ええー。」

えーじゃない。

：結局それから巴としょーもない話をして待つこと数分、突然「ふあつ」という奇妙

な鳴き声と共に正気に戻つたひまりだった。

「うつし、じやあ仕切り直しな。：巴的には、どういうトコ考へてた？」  
「んー…。タ力は屋外嫌がるし、ひまりはやたらと和に拘るし：映画館とか？」

映画館つて：。ただ暗い中デカい画面で映像を見るだけじやないかと、率直に時間の無駄だと思つた。

代わりの利くものは、楽な方に代用していけばいい。家で出来ることは家で済ませばいいのだ。

「家で見りやいいだろ。」

「バツカだな、映画館で見るからいいんじやんかあ！」

「ツ!!」

何だ今の感覚は。何気なく巴が放つた言葉に、一瞬頭の中で何かが弾ける様な錯覚を覚えた。続いて脳の前の方にズキリと鈍い感覚。

まるでスクリーンに上映される風景を見せられるように、靄が掛かつた視界に何かが

映し出される――

\* \* \* \*

「何言つてゐるの? 映画つていうのはね、映画館でみるからこそいいんだよつ!」

\* \* \* \*

「……あ……あ……。」

「……どうした? タカ。」

「タカくん? 顔色悪いよ?? 大丈夫??」

心配して覗き込んでくるひまりと巴。今のは何だつたんだろうか。今の光景は……ひ  
まりの……。

「ああいや、ごめんな。……巴、今のつてひまりが前に言つてた言葉の受け売りだろ??」

「あ、私……そんなこと言つたつけ??」

「……あ? ひまりの?」  
「……あれは確か……いや、気のせいかもな。」

確かに俺はこの会話をひまりとしたことがある。記憶に関してはある事情のせいいで不鮮明ではあるが、それでも感覚として、その言葉をひまりの口から聞いた気がしたんだ。

…じゃあ何故ひまりは覚えていない？本当に俺の気のせいなのか？

「…お前、本当にどうしたんだよ…。遊びに行くのやめようか？」

「いや、大丈夫。ちょっと変な事を思い出しだけだ。」

「…タカくん、何を思い出したの？」

「いや、まあどうでもいいじやんか…」

「どうもでよくなんかない!!」

…びっくりした。未だ且つてひまりがここまで激昂することがあつたろうか。ずっとふわふわと笑っている印象しか無かつた彼女だが、今はそのルビーのような瞳を見開き真剣な表情で見つめてくる。

射貫くような視線に思わず体を委縮させてしまいそうになつたが、そんなことよりも一つ氣になつたことがある。

「……今までどうして気付かなかつたんだ。」

「……何？」

「……お前のその目。」

「……っ!!」

おかしいな。俺は今まで何を見ていた？何を聴いて、何に触れてきたんだ？だつて俺はこんなにもひまりを愛しているし、幼馴染の連中だつて皆……死んだアイツを除けば今でも一緒に仲良くつるんで…。

……いや、でもこんな事つてあるか。ずっと見つめていた愛しい双眸の変化に、今になつて気付くなんて。

「ひまり。お前の瞳……ずっとその色だつたか？」